

道頓堀川は常に関心の的

道頓堀川を管理する大阪市建設局。同局下水道河川部河川課の大杉朗隆課長代理に道頓堀川についてお話を伺った。「道頓堀川を浄化し、市民の憩いの場にしようという動きは昭和40年代からありました。1995年からは水の都大阪の象徴として、道頓堀川周辺を訪れる人が水辺に親んでもらえる空間にしようと、『とんぼりリバーウォーク』の整備が始まりました」。平成14年に行なわれた水環境改善についての市民アンケートでは、市民の8～9割が道頓堀川や大阪湾などの水質保全対策について必要だと回答した。道頓堀川は市民の関心の的である。

上流河川の水質にも影響を受ける

大杉さんによると継続的な水質改善の結果、道頓堀川の水質もBODが1mg/l程度まで改善されているという。「水質改善のための取り組みとして水門の設置があります。水門の開閉により、まだ下水道の高度処理が進んでいない地域を流れる寝屋川の水が流入しないようにしています」。上流にある寝屋川流域の下水道処理の状況が下流にある道頓堀川の水質に影響を与えることを知り、都市近郊における下水処理の高度化を進めることの重要性を改めて認識した。

周辺で進む大規模な貯留管整備

水門整備と並ぶ取り組みの大きな柱が、貯留管整備による合流改善である。大杉さんは続ける。「現在、東横堀川と平行している松屋町筋の地下に、雨天時貯留の役割を担う北浜逢坂貯留管、通称“平成の太閤下水”を整備しています。この貯留管は地下約50mに内径6mのシールドトンネルを掘削するもので、区間は天王寺動物園付近から中之島東端の北浜付近までで、延長距離は約4.8kmあります。東横堀川、道頓堀川には、計28か所の自然雨水吐き口が集まっていますが、この貯留管が2014年度中に全面完成すれば、約14万m³の雨水を貯留することができ、東横堀川、道頓堀川への雨天時越流水の流入が解消されることになっています」。水門の整備と合流改善により道頓堀川の水質は確実によくなっている。

川辺を歩き大阪の賑わいを感じる

建設局を後に道頓堀川へ。木津川との合流点にある道頓堀川水門を見てから「とんぼりリバーウォーク」に向かう。そこはミナミの中心。有名な「戎橋」は人でごった返している。「とんぼりリバーウォーク」では、規制緩和により川べりを活用したイベントの実施や店舗の展開が行なわれている。川べり空間の運営、にぎわいの創出のために作られたのが、地元関係者や学識経験者で組織された道頓堀川水辺利用検討会、そして河川管理者である大阪市、水辺の管理を包括的に行なう法人、具体的な企画を実施する企業や団体が参加するスキームである。当初は公的機関が中心となり運営する社会実験からスタートし、現在は地元の本拠を置く大手企業が包括的管理者として運営を行なっている。民間の本格的な参加によりイベント回数も増加した。新スポットとして成功している「とんぼりリバーウォーク」であるが、今、人が集まることにより出るゴミの処理が課題になっているという。訪れる人々のモラルが問われている。



左より、道頓堀川水門、湊町リバープレイス付近の「とんぼりリバーウォーク」、戎橋から上流を見た様子